



オーガナイザー祭

価値観を起点に社会を変える仲間が集う！

オーガナイザー祭 2017

開催レポート



Community Organizing JAPAN

NPO法人 コミュニティ・オーガナイズイング・ジャパン

【主催】



Community Organizing JAPAN

NPO 法人 コミュニティ・オーガナイズング・ジャパン

＊本事業は第 4 回西武街づくり活動助成金で実施しました。

目次

- 01 目次
- 02 オーガナイザー祭 2017 の開催趣旨
- 03 タイムスケジュール
- 04 シンポジウム
- 12 分科会
- 28 パブリック・ナラティブ・フェス
- 32 コミュニティ・オーガナイズング用語集

オーガナイザー祭 2017 の開催主旨

『市民一人ひとりが、自らの価値観にもとづいて能力を発揮し、そのパワーを結集することで困難や課題を解決し、さらにその挑戦が応援される社会』の実現へ

そのための新しい場として、私たちは「オーガナイザー祭」第1回を2016年3月27日に開催し、本日が第2回となります。

会場には、「コミュニティ・オーガナイズ」に初めて触れる人、これからオーガナイザーになる人、オーガナイザーとしてリーダーシップを発揮している人、オーガナイザーを育てる人、そんなみなさんが集まっています。

この場を通して、参加者のみなさんが地域分野を超えてオーガナイズするつながりを作り、勇気を得たり、実践したい人が増えたり、それを支える人の循環ができたりすることを目指しています。

オープニングからクロージングまでの間に、みなさんのコミュニティに持ち帰ることができるものが必ずあると思います。自らの活動のためにもっと話を聞きたい人とも出会うと思います。そのために自由にこの場にいるみなさん同士交流してください。そしてまた1年後の「オーガナイザー祭」で必ず再会しましょう。

本日はご参加いただきありがとうございます。

2017年4月23日

特定非営利活動法人コミュニティ・オーガナイズ・ジャパン

タイムスケジュール

13:00

開場

14:00

<オープニングセッション>

<コンテンツ説明>

<シンポジウム>

- 発表者：板垣泰之 『夢を語る若者をそっと陰から見守るプロジェクト』
大澤祥子 『110年ぶりに刑法性犯罪を改正し、性と性暴力を取り巻く文化を変える』
- ファシリテーター：室田信一

15:00

<分科会①>

- 保健分野 -
佐藤美代子

<分科会②>

- 労働分野 -
中島聡

<分科会③>

- 震災復興分野 -
二宮雄岳

<分科会④>

- 地域分野 -
田村正人
廣岡睦

16:00

<パブリック・ナラティブ・フェス>

- 発表者：笠井成樹 『ソーシャルプロデューサーズ』
鎌田華乃子 『Believe 〜私は知ってる〜刑法性犯罪を変えよう！プロジェクト』
栗林知絵子 『豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク』
佐藤美代子 『まんまるママいわて』
松川莉奈 『ing!!』
- コメンテーター：大西健丞（NPO 法人ピースウィンズ・ジャパン代表理事兼統括責任者など）

17:00

<振り返り>

<クロージングセッション>

18:00

シンポジウム

『日本のオーガナイザーの想い・悩み・希望』

【シンポジウムの概要】

COJ が発足して 3 年が経ち、オーガナイズングの実践も蓄積してきました。このシンポジウムでは 2 人のオーガナイザーを迎えて、各自が関わったキャンペーンについて報告してもらいます。

一つは岩手県金ケ崎町で地域おこし協力隊をしていた板垣泰之さんによる報告です。板垣さんは、金ケ崎町で例年夏に開催される成人式を冬の開催に変えたいという新成人の若者たちによるキャンペーンをオーガナイザーとして支援しました。

もう一つは「ちゃぶ台返し女子アクション」による性犯罪刑法改正キャンペーンについて、「ちゃぶ女」のメンバーである大澤祥子さんに報告してもらいます。100 年間ほぼ変わっていない法律の条項を改変するために今まさにアクションを起こしています。

【学びのポイント】

変革に向けて戦略を練る時、自分たちの持ちうる力で変化を起こすことができるのか（パワー・ウィズ）、それとも自分たちの持ち得ない力に対して働きかけなければならないのか（パワー・オーバー）、整理する必要があります。2 つのキャンペーンはどちらも政策決定者を動かさない限り変化を起こすことのできない課題だったため、後者の戦略が必要でした。

こうした戦略を選ぶ際に、キャンペーンに取り組む仲間（同志）とどのような話し合いをもったのか、何が困難だったのか、そしてどのような想いがあったことで仲間と一丸となって困難を乗り越えることができたのか（できなかったのか）、そしてこのキャンペーンを通して日本でオーガナイズングすることにどのような可能性を感じたのか、二人のオーガナイザーの語りから学びたいと思います。



【プログラム担当兼ファシリテーター】

室田信一 COJ 副代表理事、首都大学東京准教授

アメリカでオーガナイズングを学び、移民コミュニティのオーガナイザーとして従事したのち、2005 年に帰国。以降、日本の地域の実践に関わりながらオーガナイズングの研究や教育に関わる。2013 年に COJ 代表理事の鎌田と知り合い、他の仲間とともに COJ を設立。



【発表者①】

板垣泰之 元・金ケ崎町地域おこし協力隊

仙台市生まれ。奈良大学大学院を修了後、発掘調査員として埋蔵文化財の発掘調査にたずさわる。2014年9月より岩手県金ケ崎町地域おこし協力隊として文化財を用いた地域おこし、地域づくりをおこなう。協力隊の活動の中でコミュニティ・オーガナイズングの考え方や手法が活かせるのではないかと思います、2016年冬の岩手ワークショップに参加。2017年4月より群馬県にて文化財関係職で勤務。

『夢を語る若者をそっと陰から見守るプロジェクト』

岩手県金ケ崎町では、夏の成人式が伝統としておこなわれていました。2016年度の新成人から夏から冬に成人式の次期を移行したいと町に相談がありましたが、プロジェクトとして成り立っていないものでした。そこで、当時金ケ崎町で地域おこし協力隊をしていた発表者がコミュニティ・オーガナイズングの手法を少しずつ新成人に伝えました。そして彼ら自身に行動してもらう事により新成人がアンケートや町長への要望提出を行い、2016年度の成人式は53年ぶりに冬の開催となりました。

成人式 夏から冬へ

金ケ崎町 本年度の対象者ら提唱

金ケ崎町は、1964（昭和39）年から実施している成人式の夏季開催を、「成人の日」が設定されている1月の冬開催へと変更する。本年度は「成人の日」を含み3連休の中日に当たる来年1月8日に実施する。29日、同町役場で行われた定例記者懇談会で高橋由一町長が発表した。（菊池 藍）

同町の成人式は、軽装参加が可能な夏開催による家計負担に配慮するなどの理由から、当時の婦人会などの呼び掛けで、64年から、冬開催から終戦記念日の8月15日開催に変更された。

今回の開催時期見直しは、本年度の新成人たちで構成する成冬会が、町に直接要望したことがきっかけ。同会は今年1月以降、町長への直接要望のほか、独自の住民アンケートも実施するなど冬開催実現に向け町へ働き掛けてきた。

新成人の要望を受け町は3月、18歳から59歳を対象としたアンケートを実施（回答率は38.0%）。冬開催が94%、夏開催の43%を上回ったほか、今後成人式を迎える10代とその親世代に当たる30〜40代の58%が冬開催を希望していることから、今月実施した町民懇談会でも合意形成を図った。

本年度の開催日とする来年1月8日には当初、消防山初式が予定されていたが、日程を変更。出初式を前日の7日に行うほか、6日に開催予定の町新年交歓会も1日早める。

この日の記者懇談会には、新成人を代表し、成冬会代表の阿部輝さん（19）も出席。「今回は、冬開催を決定していただき感謝している」と明るい表情で語り、「冬開催となり、」

金ケ崎町の成人式冬開催決定を受け、喜びと意気込みを語った新成人代表の阿部輝さん（右）

胆江日日新聞 2016年6月30日

●なぜ、関わることになったのか

約1年前、金ケ崎の2016年度の成人式が冬に開催されること決定しました。その背景には1年前の1月から3月までに署名などを集めて、活動をおこなった新成人がいました。そして、その後ろで見守り、活動を見守る役割として、自分がいたような気がします。そもそも、私は金ケ崎町に地域おこし協力隊として着任し、歴史を使って町おこし、まちづくりをおこなうという任務で活動していました。しかし、金ケ崎町は岩手県内でも有数の工業団地を持ち、近隣市町に繁華街を持っているため、働く場所としてはよいが、遊ぶ場所ではないという認識を若い人たちが持つ町でした。そこで、若い世代に魅力ある場所であると感じてもらうためにも、若い世代が積極的に理想をかなえられるようにしてほしいと思ったのがきっかけでした。

金ケ崎での新成人を見ていると、現状では満足をしていないようだけれども、行動を起こすのは面倒だという認識であるような気がしました。そこで、コミュニティオーガナイズングの中のエッセンスを利用して後押しをおこない、理想を実現することができる成功体験が大切なのではないかと感じ、サポートをおこないました。結果として、どのぐらい彼らにとって経験になったのかはわかりませんが、今年の1月に実施された成人式では自分たちで計画して、各方面に勝手に許可を取り花火を上げるということもおこなってしまいました。(行政的には報告もなかったため、やや問題でしたが。)しかし、ちゃんとした手段を用いて、やりたいことをできるようにする。感覚はつかめたのではないかなと思っています。

●彼らに伝えたいこと

なぜ、彼らの要望が受け入れてもらえなかったかを考えました。すると、さまざまな人に共通する話題ではなく、勝手な意見であると取られたとの話が出てきました。そこで、理由をしっかりとまとめていく際にグループに対してのコーチングをおこない、「なぜ、成人式を冬にしたいのか」というストーリーを作ることになりました。そして、初期のメンバーは男性しかいなかったため、振袖を着たいなどの要望があると考えられる女性の意見がわからず、コアメンバーとして女性に声をかけ、その学年の意見として反映されるようになりました。この部分もコーチングの際に「女性は振袖が着たいと思っているはず。」との意見から、実際に聞いてないと説得力に欠けるという声上がり、メンバーを探したものでした。

そして、少しずつアンケートを一緒に集めてくれる新成人メンバーを地元で声をかけられそうな人たちにお願いするようにし、そのメンバーからさまざまな世代の人の意見をアンケートで取ろうと思っているはず。」との意見から、実際に聞いてないと説得力に欠けるという声上がり、メンバーを探したものでした。

そして、少しずつアンケートを一緒に集めてくれる新成人メンバーを地元で声をかけられそうな人たちにお願いするようにし、そのメンバーからさまざまな世代の人の意見をアンケートで取ろうということになりました。

そうして、自主的な打ち合わせやアンケートを予定していることを地域紙である胆江日日新聞に取り上げていただき、その結果、町の行政に問い合わせが来ることになりました。その後、町長にアンケート結果を提出した際に、若者が自主的に活動をおこなったことを評価したいという話や、行政側で取ったアンケートでも冬開催に賛成がやや優勢だったことから、行政内の諸手続きをおこなった上で冬開催が決定しました。



●金ケ崎に残ったもの。自分が感じた事

まず、金ケ崎での地域おこし協力隊は2年半の任期途中で現在の職である群馬県埋蔵文化財調査事業団に就職したため、現在は離れているような形になっています。また、金ケ崎での地域おこし協力隊としての成果も、遺跡などを子どもたちと散策し、故郷に誇りを持ってもらうということで動いたので、実際の成果が出るのは10年後ぐらいになるのかもしれませんが。新成人も実際に活動をおこない、1月に成人式を実施したため、これからどのように金ケ崎町で変化するかを見届けるにはまだ結果が出ていない状態だと思います。しかし、その中でも成人式実行委員長が新聞にインタビューを受けた時の記事に「やりたいことがあればまずはやってみる。文句を言っても変わらない。」という言葉が載っているのを見つけました。この言葉は、成人式のプロジェクトが始まる前は「仕方ないっすよ。」だったことから考えると大きな進歩だと感じています。

また、自分自身としてはやはり理想をかなえるためには進むしかないのかなと思っています。しかもがむしゃらにではなく、計画性をもって進めていくことができたのが、今回の成人式のプロジェクトで時間がない中で進めることができた大きな理由かなと思います。また、田舎の特性なのか日本人の特性なのかわかりませんが、関係がないことに関して興味がないということは、さまざまな活動を知ってもらう際に大きな障壁となるのかなと思います。成人式のアンケートでも一般の人たちにアンケートを取ると、関係ないからどちらでもよいという意見も多く、そういう人たちに興味を持ってもらうためにはどうするのが問題であると感じています。

いくら関係するかもしれないといっても、現時点で関係がないのだからそれよりも自分に今現在、関係していることに力を入れたい。となると社会に関することの優先順位が低くなることになるのかなと思います。それをどのように共感してもらうかは課題になるかと考えています。

最後に、自分の活動は目の届く範囲を良くしていく。ということで考えています。社会や世界を変えるのは難しいかと思いますが、世間を変えられると思います。その良くなっていく世間が多くなれば地域が変わり、良くなっていく世間がもっと増えればより良い空間になっていくのではないかと思います。自分が良く生きる、暮らすために、また、少しずつ楽しんでいきたいと考えています。



【発表者②】

大澤祥子 ちゃぶ台返し女子アクション共同発起人

子ども時代過ごしたアメリカから帰国後、周囲に馴染めずに感じた疎外感や無力感から、一人一人が力を発揮できる市民運動や社会運動に関心を持つようになる。日本で生きる女性が感じる生きづらさを女性が自ら声に出し、変化を起こしていくムーブメントを作りたいと思い、2015年にちゃぶ台返し女子アクションを立ち上げる。以前はコンサルティング会社でNPO・NGOの戦略策定支援に従事していた。

『110年ぶりに刑法性犯罪を改正し、性と性暴力を取り巻く文化を変える』

性における「イヤよイヤよも好きのうち」という考え方と、性暴力と「同意」が軽視されている現状を変えるために、明治以来ほぼ変わっていない刑法性犯罪の改正を求め、自身の体と性について一人一人の意思を大切にするカルチャーを広めることを目的としています。NPO法人しあわせなみだ、性暴力と刑法を考える当事者の会、ちゃぶ台返し女子アクション、明日少女隊の4団体が連名で立ち上げました。オンライン署名・院内集会・ロビイング活動を通して議員に市民の声を届け、実態に即した刑法改正を求めています。また、街頭アンケートや性における「同意」について考えるワークショップを大学生中心に展開し、カルチャーを変えることを目指しています。

●オーガナイズ・センテンス

私たちは、自身の体と性について一人一人の意思を大切にする法制度とカルチャーを作るために、性と性暴力の現状に問題意識を持つ大学生および20-40代の女性をオーガナイズし、性暴力の実態や性における同意、現行法について情報発信をして問題意識を広め、ロビイング活動を通して国会議員にその問題意識を届けることで、2017年6月の通常国会終了までに、実態に即した形での刑法改正ならびに誰もが一人の人間として尊重される法律と社会を求める1000人の同志のネットワークを作ることを目指します。



●同志は誰か？同志が直面している問題は何か？

今の社会では、自分の体や性に対する意思が尊重され難いと感じています。痴漢やセクハラは一向になくならず、最近では大学生間のレイプ事件（キャンパスレイプ）が相次いで発生しています。私たちは小さい頃から、「強引に攻めることが男らしい」「求められて受け入れることが女性らしい」というメッセージに囲まれながら育ちます。また学校の性教育では、性行為において相手の同意を得る大切さや、いつでも断る権利があることは教えてくれません。結果として、「イヤよイヤよも好きのうち」という価値観が蔓延し、相手の同意を無視した性暴力が「仕方ない」こととして片付けられてしまいます。

さらに、現在の刑法性犯罪は、性暴力の実態に全く沿っていません。現在の刑法では、著しく抵抗が困難と言える程の暴行や脅しがないと強姦と認められないのです。しかし、性暴力被害の多くは面識がある人によるものであり、このような関係性を利用した性暴力では、恐怖でフリーズしたり、知っている人だからこそ抵抗出来ない場合が多いです。そのため被害に遭った人の多くは、抵抗しきれなかった自分を責めてしまったり、救われずに泣き寝入りをするしかない現状となっています。



●問題の解決のためにどんな取り組みが必要か？

女性が男性の所有物とされた時代に作られた刑法性犯罪が110年ほぼ変わっていない現状は、政治家がこの問題を真剣に扱っていないことを表しています。実際、刑法改正の審議は何回も後回しにされています。政治家にとって無視できない問題となるよう、被害者を始めとする多くの一般市民が改正を求めていることを訴え、プレッシャーをかける必要があります。

問題に対して世論を盛り上げるためには、まず、性暴力の実態や現行法の問題点に対する理解を広める必要があります。同志に自分ごととして感じてもらうためには、性暴力が日常化されている現状を伝え、気付くきっかけを作る必要があります。また性や性暴力について話すのは勇気がいりますが、様々な性別や属性の人たちが一緒に声をあげることで、安心して声をあげられる、声をあげることがかっこいい、という流れを作っていけると考えます。さらに、性における同意という概念を広めていくことが重要です。同意を得る責任はアクションを起こす側にある、沈黙は同意を意味しない、という認識が広まれば、今後の性被害の予防だけでなく、「断らなかった・ついていったあなたが悪い」と被害者を責める人も減るでしょう。

●変革の仮説は何か？どのように同志の資源をパワーに変えているのか？

性暴力の実態や同意の大切さについて知ること、性を取り巻く社会的意識や現行法のおかしさに気づき、その違和感や怒りを言葉にして周りと共有する機会を増やすことによって、性暴力の問題に対してアクションを取れる同志のネットワークを作ります。具体的には、ウェブ上での性暴力被害体験のシェアと発信、性暴力に対する市民の意識についての街頭アンケート、アートパフォーマンスなどを通して、性暴力を取り巻く沈黙を壊し、被害者に一人ではないとメッセージを発信することで、性暴力の「社会問題化」を目指します。さらに同意について考えるワークショップを、4つの大学において新歓期に学生主体で自主開催をしてもらい、同意を大切にカルチャーを広めて行きます。

刑法改正の実現に向けて、意思決定者となる法務委員会の国会議員にキャンペーンメンバーが直接会いに行き（ロビイング活動）、自分のストーリーと意見を語り刑法改正への要望と期待を伝えることで、関係性を深めます。さらに、刑法改正を求める院内集会やオンライン署名を通して多くの市民が関心を持っていることを伝えることで、優先順位の高い問題として認識してもらい、プレッシャーを高めます。

●スノーフレークしていく組織をどう作っているか？

本キャンペーンは、NPO 法人しあわせなみだ、性暴力被害と刑法を考える当事者の会、ちゃぶ台返し女子アクション、明日少女隊の4つの団体で立ち上げました。各団体からの代表が集まりコアチームを構成しました。それぞれの強みを活かし、NPO 法人しあわせなみだと性暴力被害と刑法を考える当事者の会はロビイング活動、ちゃぶ台返し女子アクションと明日少女隊は同志を巻き込み世論を盛り上げる活動を中心に担っています。

私が所属しているちゃぶ台返し女子アクションでは、5人でリーダーシップチームを作り、戦略の領域に合わせて3つのチームを展開しています。ロビイング・地域展開チームでは、他のメンバー団体と協働してロビイングを実施する他に、法務委員会の議員の選挙区が多い地域（神奈川・名古屋・長野等）で同志をリクルートし、各地域でチームを立ち上げました。オンラインでの啓発活動を担うチームは、インスタグラム等のSNS、海外事例の情報発信、など企画ベースでチームを作りました。ワークショップチームには、一般向けと大学生向けの二つのチームがあり、大学生チームは6人の大学生がメンバーにあり、各自の大学コミュニティにおいてチームを作っています。

●キャンペーンを通しての一番の学びは？

本キャンペーンを通して、異質な団体やコミュニティ同士が連携してそれぞれの強みや資源を活かすことにより、大きな広がりを作り、これまでにないアプローチが可能になるということを学びました。刑法改正に向けてプレッシャーをかけ、性暴力の「社会問題化」に貢献できたのも、色が違う4つの団体が一緒にキャンペーンに取り組んだからだと思います。ちゃぶ台返し女子アクションにとっては性暴力の問題に取り組むのは初めてであったため、専門団体が持つ知識や権威、議員や専門家とのネットワーク無しには、このような大きな問題に取り組めなかったと思います。

逆に、ちゃぶ台返し女子アクションには他の3団体にはない、COの知識とスキル、同志とのつながり、組織力があつたからこそ、ここまで普通の市民を巻き込み、広がりを作ることができました。またアーティスト集団のセンスとスキルがあつたからこそ、従来の活動とは違う、同志がかっこいい、関わりたいと思えるキャンペーンのイメージを作れたのだと思います。個人だけでなく、団体としても互いの関心と資源を交換し、協働することで、これまでにない大きなパワーを構築できたと実感しました。

【プログラム担当からのレポート】



室田信一 COJ 副代表理事、首都大学東京准教授

『政治的な抵抗を最小限にし、変化を起こすことができる存在に対して、課題の当事者が働きかけられていた』

シンポジウムでは二人のオーガナイザーから実践の報告をしていただきました。

一人は岩手県金ケ崎町に地域おこし協力隊として関わっていた板垣泰之さんです。板垣さんは、金ケ崎町で例年夏に開催される成人式を冬の開催に変えたいという新成人の若者たちによるキャンペーンをオーガナイザーとして支援しました。

もう一人は「ちゃぶ台返し女子アクション」による性犯罪刑法改正キャンペーン「Believe」について、「ちゃぶ女」のメンバーである大澤祥子さんです。100年間ほぼ変わっていない法律の条項を改変するために現在進行形で取り組んでいるアクションについて報告してもらいました。

二人がオーガナイザーとして取り組んできたキャンペーンは、どちらも直面している問題を解決するためには、その変化を起こすことができる存在（町長や国会議員など）に対して働きかける必要がありました。金ケ崎町では、新成人たちが自らアンケート調査をおこない、町民の声を届けることで変化を起こしました。性犯罪刑法改正キャンペーンでは、政治家に対するロビー活動の他に、大学生が中心となってワークショップを開催し、草の根で支持層を拡大するように働きかけています。

日本のような保守的な土壌では政治的な変化に対して強い抵抗を生み出すことが少なくありません。二人のオーガナイザーはそうした抵抗を最小限にしながら、課題を抱える当事者たちによる草の根の活動によって、変化を起こすための力（パワー）を生み出すことに成功していた事例と言えます。

また、二つの事例を通した学びとして、どちらのキャンペーンも期限が決まっていたため、その限られた時間軸の中でキャンペーンのピークを複数回設定して、短期間の間に多くの人の関心を高めるように働きかけたことです。そのためにはどちらのキャンペーンも複数のチームに分かれて準備を進めていました。金ケ崎町はアンケートを実施するチーム、成人式を準備するチーム、それに加えて成人式当日に花火を上げるというサプライズまで手分けをして準備を進めていました。性犯罪刑法改正キャンペーンでは政治家へのロビー活動を進めるチームに加えて、大学キャンパスでのワークショップをチームに分かれて推進し、またそこで知り合った大学生がキャンペーンをさらに広げていくという広がりを作り出したことも、短期間でインパクトを生み出すことにつながりました。

どちらのキャンペーンも普段は政治的な課題に対してアクションを起こすことが珍しい（と思われる）若者が積極的に関与することで、それが「てこ」となり、従来簡単には動かすことができない大きな力（政策決定者）を動かすことにつながったということも、日本におけるコミュニティ・オーガナイズムの可能性を感じることができるキャンペーンだったのではないかと思います。



分科会

『私の分野で、オーガナイズを実践するとしたら？』

- 4つの分野の実践事例の共有 -



【分科会①】

佐藤美代子 まんまるママいわて代表

2011年、東日本大震災をきっかけに、助産師が行う育児サロンを被災地で展開。県内9か所以上、250回以上2500人の母子と出会ってきました。その中で、「岩手県にも産後ケア施設が欲しい」という課題に対し、ママたちをオーガナイズし、2016年10月に産後ケアハウス開設に至ります。

『産後困難を感じたママたちが作る産後ケアハウス』

産科過疎地域、そして東日本大震災で被害を受けた岩手県で、産後「大変だった」と困難を感じたママたちが、自分たちの経験を話し、それを研究することで、岩手県初の産後ケアハウスを2016年秋に作りました。

この分科会では、オーガナイズに2年間取り組み、実際にゴールを達成したことの振り返りと、実践でのつまずきや気付きなどを参加者と共有し、深めていきます。また関係構築できなかった例など、メソッド通りにやっても、難しかったことなども共有します。



●オーガナイズ・センテンス

私たちは、一人一人命を大事にする社会を成し遂げるために、岩手県中部地域の産前産後の困難を抱えた経験を持つママをオーガナイズし、ママの居場所作り、産前産後ケアシステムを考え研究することで、2016年8月までに、1か月延べ90名が利用できる産前産後ケア施設のスタートを達成します。

●同志は誰か？同志が直面している問題は何か？

同志は、岩手県中部地域で産前産後に困難な経験を持った母親です。

同志が直面している問題は、岩手県中部地域（花巻市北上市）の母親達が、現在、核家族化が進む中、家族・地域の協力を十分得られないままに、妊娠・出産・育児を行っています。心身のケアが十分に受けられなかったママ達は、不安な気持ちで子育てし、家族にも地域にも頼れず、自信の無い子育てにつながっています。それがひいては「虐待」「産後鬱」などにもつながっていきます。

●問題の解決のためにどんな取り組みが必要か？

下記の3つのことが必要だと考えました。

- ・産前産後の困難な経験を持つ母親たちが、その困難さを、語り「自分だけではなかった」と思える場
- ・産前産後の困難な経験を直接、ケアされる仕組み
- ・行政等で、産前産後の問題を取りあげ、安価でケアを受けられる仕組み作り

●変革の仮説は何か？どのように同志の資源をパワーに変えているのか？

私たちは、産前産後の困難を持つママの不安さ、産後鬱や虐待の問題を解決するために、産後ケアシステム作りに集中し、同志をオーガナイズし、同志の困難を語り、周りに伝えていく力を使い、仕組みを作っている行政がサービスに資金を投入することによって、ゴールを達成する力を生み出すために、産後ケア研究事業やシンポジウムを行います。

●スノーフレークしていく組織をどう作っているか？

役員4名、運営チーム、産後ケアチーム、食育チームなど、会員の中から、自分の役割を新たにしながら、スノーフレークをさせています。

●キャンペーンを通しての一番の学びは？

「ママたちの物語を語る力」を使い、オーガナイズしていく中で、実際に研究参加者から、産後ケアスタッフになった者もいます。まさしく、オーガナイズであったと思います。他方では1:1での関係構築をせずにチーム構築をしようとしたため、結局うまく行かなかったチームもありました。またキャンペーン中に、予想外のハプニングが起きた際に、チームの雰囲気が悪くなったこともあります。社会活動だからこそ、しっかりと価値観で結びつかないと難しいと感じました。

【ファシリテーターからのレポート】



松澤桂子 COJ 理事



関口真司
COJ WS コーチ

1) プレゼン概要

■助産師としてママをサポート。だけど…

助産師の仕事をしていた佐藤美代子さん。しかし、自分自身の出産と育児はとても大変な経験でした。家族も頼りづらかった中、力を貸してくれたのは助産師の仲間たち。助けてくれるのは家族だけじゃないということに気づき、活動がスタートします。

■被災地支援から始まり、産後ケア施設オープンへ

2011年、岩手県の沿岸被災地で、育児相談やリラックスしておしゃべりできる場として「まんまる」サロンがスタートしました。その後も活動は続き、沿岸部だけでなく岩手県中部地方にも関心が向きます。そして2016年10月には、花巻市に岩手県発の産後ケア施設「まんまるぽっと」がオープンするに至りました。

そのときのオーガナイズ・センテンスは、

『私たちは、

(共有目的) ひとりひとりの命を大事にする社会を成し遂げるために、

(同士) 岩手県中部地域の産前産後の困難を抱えた経験を持つママをオーガナイズし、

(活動) ママの居場所づくりをし産前産後ケアシステムを考え研究することで、

(戦略的ゴール) 2016年8月までに、1ヶ月延べ32名が利用できる産前産後ケア施設のスタートを達成します。』

■キャンペーン達成までの経緯

「まんまるぽっと」オープンまでにもたくさんの挑戦がありました。2014年の活動開始時はメンバー4人。スノーフレイク型の組織を作るために、一対一の関係構築を大切にしました。その結果、翌年にはメンバーが8人になり、その後も関わる人はどんどん増えていきます。小さいチームを作っていくことで会員が自分の役割を感じられる工夫もしました。また、COに出会ってからは月1回、2時間の会議を欠かさず行い、関係構築や目的の確認などを継続したそうです。

質問：メンバーを増やしていった経緯を詳しく

回答：最初の四人はずっと仲のよかったメンバーでした。そのメンバーでやればうまくいくに違いないと思っていたけど、団体が大きくなり活動が広がる際に、話し合いがスムーズに進まないことが出てきました。すごくもめることもありました。

改めてそれぞれの経験や意見を「一から」話し合ったら新しいことがわかったり、価値観を共有できました。その上で、やっていくにはもっとメンバーが必要だと感じました。

人を増やす上では一対一の対話が大切。大事にしたいことを知るために、パーソナルな話を聞きます。話したくなければ、話さなくていい。でも辛い経験を語ってもらえる関係になれました。

質問：メンバーにどうやって活動に関わる時間を作ってもらうのか？

回答：いろんな関わり方があり、気持ちのある人がそれぞれの生活に合う関わり方をできるようにしています。それ以上のことは求めないことにしています。

質問：思いだけでなくルールも必要になるはず。その時何を大事にしたか？

回答：そこにいる人でルールを作ることです。ルールをなんのために作るのか、というときにオーガナイズ・センテンスに立ち戻るのが大切です。

質問：誰もがリーダーでありながらもバラバラにならないためには？

回答：全員の原点（オーガナイズ・センテンス）に立ち戻ることで、手を繋ぎあえました。

3) ファシリテーターとして登壇者から学んだこと

佐藤美代子さんの実践からは、戦略的ゴールに向かいながらも一人ひとりを大切にし、メンバーと真剣に向き合う姿勢が伝わってきます。一方で、ただの「仲良し」で終わらないためにもチームの仕組み・ルールがしっかりと考えられています。これは、オーガナイズ・センテンスを大切にして何度も振り返り、目指す場所を確かめ合った同志たちだからこそできることなのではないでしょうか。





【分科会②】

中島聡 労働系オーガナイザー

人材業界で働く中で、矛盾を感じ地域の労働組合に加入。異なる企業で働く若手を中心に労働相談、団体交渉、抗議行動などを担当。ハローワークの求人票適正化キャンペーンを実施。固定残業代の表記を適正化させることに成功。2015年10月から建築業界の労働組合にて、フルタイムのオーガナイザースタッフとして活動中です。

『職人に適切な単価を！労働組合でのCO実践』

建設産業の労働組合におけるコミュニティ・オーガナイズングの実践事例です。まだ直面する課題が明確になっておらずキャンペーンタイムラインでいうところの「基礎作り」段階です。600人の組織の中で、25名のLineグループ参加者と3名の事務局チームの構築を終え、直面する課題のあぶり出しをしていこうとしています。下請け重層構造の中で起きている建設職人の直面する理不尽な構造を変えていこうとする取り組みです。



●同志は誰か？同志が直面している問題は何か？

同志は、建設業界で働く京都在住の職人です。同志が直面する課題は、不適切な単価、社会保険未加入、労災隠しなど、下請け重層構造の中で起きている課題全般です。

●問題の解決のためにどんな取り組みが必要か？

まず、直面する課題をあぶり出すことを取組中です。その上で、直面する課題毎にパワーオーバー型のキャンペーンが必要になると考えています。現在は、働き方や働く現場毎に直面する課題やターゲットが異なることが見えてきたため、同志を現場の違いに応じて分化し、現場毎に直面する課題をあぶり出し、絞り、キャンペーンを作っていくとしています。

●変革の仮説は何か？どのように同志の資源をパワーに変えているのか？

課題のあぶり出しの最中なので、まだ未定です。

●スノーフレークしていく組織をどう作っているか？

まだ第一層ですが、今後は丁場や職種を軸に作っていく予定です。

●キャンペーンを通しての一番の学びは？

丁場毎に同志を分化していくことの必要性です。パワーオーバー型のキャンペーンの場合、同志の範囲が広いとそれぞれの同志の直面する課題やその問題を解決できる権限を持つターゲットが異なってくるのではないかと感じています。ゼネコン、ハウスメーカー、地域の工務店、公共工事などの4つの分類くらいを検討中です。

【ファシリテーターからのレポート】



小田川華子
COJ フェロー



是常高洋
COJ WS コーチ

1) プレゼン概要

京都での建設下請けワーカーの組織化にチャレンジしている中畠聡さんが、実践を振り返って、自分なりの戦略や向き合っている課題について報告してくれました。キャンペーンを検討する前の基礎作りの段階の話でした。

- ・ただ組合員をつなげるというのではなく、建設業界の労働環境を良くしていくことを目指すことを明言した。
- ・組合員と出会うために現場を順々に回っていく方法だと会えないことが多いため、核になり得そうな組合員にアポを取って、関係構築のための1：1ミーティングをした。
- ・自分が考えていることをしっかり相手に伝え、核になるメンバーと価値観、課題意識の共有をした。
- ・Union Bar を2か月に1回程度開催し、建設現場のワーカーならではの課題について話ができる場を作った。日常的に行われる労災隠し。年金に入らないことのリスクの客観的理解促進。
- ・バーで様々な課題が見えてきたが、組織化のきっかけとして取り組むのにふさわしい課題の選び方がわからない。

そこで、カナダで労働組合活動の経験がある特別ゲストの名取学さんが、課題を出し合うためのマッピングの手法を紹介しました。集会参加者が大きな人形の図を囲み、各自が痛みを感じる場所にシールを貼る方法、調理場の図を囲み、事故が起こった場所にシールを貼る方法を活用して、ひとりひとりの課題が、共通の課題であること、それがなぜ起きているかを考えるきっかけを作っていたそうです。

2) 質疑応答

質問：正社員と派遣は分けて組織化するのか？

回答：建設で派遣は法的には禁止されているが、実際には「ひとり親方」という実質上派遣や偽装請負のような働き方が横行している。正社員はほとんどいない。だから、正社員と派遣を分けることは意味がない。

質問：労働組合とCOのかかわりは？

回答：労働組合の組織化はCOそのもので、深くかかわっている。

3) ファシリテーターとして登壇者から学んだこと

ばらばらの職場で働く組合員を結びつけることはなかなか難しいことだと思いますが、自分なりに戦略を練って、丁寧に企画チームを作ること、組合員たちが語り合える場を作ることがやはりCOのカギだと思いました。この取り組みを進めている中嶋さんの熱い思いと弛みない努力、前進し続けるエネルギーが素晴らしいと感じました。これからの展開がとても楽しみで、またお話を聞きたいです。





【分科会③】

二宮雄岳

釜石リージョナルコーディネーター協議会（釜援隊）統括マネジメント

東京農業大学農学部卒。地域金融機関の法人担当総括として職員向け課題解決型営業のOJT指導と顧客向けの経営改善ハンズオン支援活動を行う。

2014年10月に退職し、現在は釜石リージョナルコーディネーターとして、コミュニティ形成支援、中心市街地活性化、復興庁先導モデル事業（地域包括ケア）他を担当。その他に釜石市シティプロモーション推進委員会ローカルベンチャー事業チーフメンターなど。

『住民が可能な限り住み慣れた地域で、安心して、自分らしい暮らしが続けられる見守り体制の構築』

私達は、釜石市の被災地コミュニティの形成支援と機能強化を目的として「住民」・「支援団体」・「行政」をオーガナイズすることにより「住民が可能な限り住み慣れた地域で、安心して、自分らしい暮らしが続けられる見守り体制の構築」を図るプロジェクトに取り組みました。

震災により従来の地域コミュニティから分断された多数の被災者が住宅再建により新たな地域に流入したり、人口減少、少子高齢化のなかでシュリンクする地域コミュニティという課題に取り組んだ際、成果を獲得できた要因は大きな「意識転換」の数々でした。



●オーガナイズ・センテンス

私達は釜石市の被災地コミュニティの形成支援と機能強化を目的として「住民」・「支援団体」・「行政」をオーガナイズすることにより「住民が可能な限り住み慣れた地域で、安心して、自分らしい暮らしが続けられる見守り体制の構築」を行います。

●同志は誰か？同志が直面している問題は何か？

同志は、釜石市の地域課題を自分ごととして捉える人達、地域住民とそこにコミットする専門家・行政です。

同志が直面している問題は、下記のようなことです。

- ・震災により従来の地域コミュニティから分断された多数の被災者が住宅再建により新たな地域に流入。
- ・人口減少、少子高齢化のなかでシュリンクする地域コミュニティ。
- ・住民が可能な限り住み慣れた地域で、安心して、自分らしい暮らしが続けられる様にするためには、「医療」・「介護」・「予防」・「生活支援」・「住まい」のサービスが、個々の課題やニーズに対し、適切にコーディネートされた形で提供される仕組みづくりが必要。
- ・介護保険制度の改正により軽微な生活支援事業はフレーム外へ。

●問題の解決のためにどんな取り組みが必要か？

- ・住民×行政×支援者の新しい行動のスキーム構築と自らが行動することが必要。
- ・住民×行政×支援者の力を、共通する目標を設定し一定の方向に向けて連携させることで、既成概念を超えた施策の実現をはかる。
- ・住民、行政、支援者の「自分ごと化」意識を十分に進め、連携することの可能性を意識出来るようにする。

●変革の仮説は何か？どのように同志の資源をパワーに変えているのか？

- ・それぞれのあるべき姿を再定義する→支援者が去った後、あなた達しかないんだ！
- ・使命感を鼓舞する→プロとして為すべきことがある！
- ・為すべきことに集中する体制をつくる→ご託、言い訳を並べるな！全ては結果あってこそ
- ・対立を恐れず「正論」という一石を投げ、意識変革を促し続ける→関係性構築という化学反応の触媒となる

●スノーフレークしていく組織をどう作っているか？

「かまいし版地域包括ケア」みんなの「プロジェクト」による地域世話やき人 37 人の認証と 4 つのコミュニティビジネスの立ち上げ。

→ 4 つのコミュニティビジネスのチーム構成（人数）

- (A) お片付けサービス：9 人
- (B) 資源ゴミ出しサービス（暖チーズ）：11 人
- (C) 結いの便利屋：9 人
- (D) 平田はまなす：8 人

●キャンペーンを通しての一番の学びは？

成果を獲得できた要因は大きな「意識転換」の数々！

- ・地域住民：「福祉は行政の役割という既成概念」の打破。「地域課題を住民自らの発意で解決する仕組みづくり」への目覚め。
- ・社 協：「受け身の受託者」から「先導的開拓者」への転換。「住民を変化させた」という自信。
- ・行 政：「消極的社会福祉事業」から「積極的社会福祉事業」への意識転換。

【ファシリテーターからのレポート】



安谷屋貴子
COJWS 事業担当



鎌田華乃子
COJ 代表理事

1) プレゼン内容

関東地方からの参加者が多いが、どのような地域も課題を抱えています。地域の課題を真に解決するのは地域住民です。復興支援の枠組みで外から入っている「釜援隊」が中心になり続けるのではなく、作った仕組みの主体的な担い手を地域住民にシフトするのが目指す姿。「行政」や「隣の〇〇さん」が当たり前「やってくれていたこと」をどう「自分でやりたい！」に変化させるのか、そのヒントを一つでも多くみなさんの地域に持ち帰ってほしいです。

■互助の仕組み、地域の力で

オーガナイズ・センテンス: 私たちは「被災地コミュニティの形成支援と機能強化」を 目的として、「住民」「支援団体」「行政」をオーガナイズすることにより、「住民が可能な限り住み慣れた地域で、安心して、自分らしい暮らしが続けられる見守り体制の構築」を図る

人口減少、高齢化、復興公営住宅の建設や住宅再建が進む地域には、住民自らが生活支援の担い手となり、地域づくりに参加することで、支え合いによる生活の基盤を確保する必要があります。取り組み内容は以下の通りです。

- ①復興公営住宅や自宅の再建で移り住んだ住民と町内会等の交流による新たなコミュニティづくり
- ②住民主体となって運営する、地域の課題を踏まえた生活支援に関するコミュニティビジネスの立ち上げ
- ③地域の支え合いづくりの中心的役割を担う「地域世話焼き人」の育成

釜石市役所、釜石市社会福祉協議会、釜援隊と住民が進めるプロジェクトだが、『釜石』と名の付くみなさんが担い手ですよ」と言い続けました。釜援隊が中心ではないことを伝え、「自分ごと化」を進めるためです。

■タイムライン

地域づくりワークショップ⇒勉強会⇒コミュニティビジネス立ち上げワークショップ、先進地視察、プロジェクト実施⇒地域カルテ作成研修⇒事務局ミーティング

■成果

先進地視察が大きな刺激になり住民に変化。自分ごと化が進みました。自分たちの地域は自分たちの手で作る・支える！という想いが結実し、「かまいし版地域 包括ケア “みんなの” プロジェクト」による地域世話焼き人 37 人の認証と 4 つのコミュニティビジネスの立ち上げにつながりました

2) 質疑で上がった内容と回答

質問：核となる住民をどう見つけていったのか？

回答：最初のワークショップは100人規模でした。そこから小さくして残った人を核としました。また、最初に声をかける際に意識したのは、「〇〇長」など地域で「有力者」とされる方ではない、一般の方をオーガナイズするようにしたことです。有力者の人たちは行政に対して要望を上げることは多いが、「コミュニティ・ビジネスの担い手」にはなりにくいと考え、後段のコミュニティ融合のパートで役割をもって頂きました。

質問：担い手の働きにはお金が付きやすいが、コーディネートには付けにくい。どのように進めたのか？

回答：「釜石リージョナルコーディネーター協議会」は総務省の「復興支援員制度」に基づいて活動しており、予算も総務省から出ています。

質問：先進事例への「すごい」をどう「やってみよう」に変えたのか？

回答：「できる！できる！」と言いつけました。できそうなことにまで分解して、できそうなことから取り組み始めました

質問：地域内の隠れた人間関係をどうやりくりしたか？

回答：どうにもしていない。邪魔をしないように伝えています。

質問：縦割りの行政とともに取り組むための核となる職員をどう見つけたか？

回答：復興推進室が釜援隊のパートナーだが、福祉行政の担い手である課の立場もあります。

(3) ファシリテーターとして登壇者から学んだこと

二宮さんの発表から、関西で先進事例を学んだことから、「心」はあっても「頭」がなければ実践はできないということがよくわかりました。また、二宮さんは地域住民、行政、社協がどのような資源を持っているかを把握し、それらをうまく生かしていました。自分の持てる資源が生けると人は輝くのだと実感しました。





【分科会④-(1)】

田村正人 コミュニティ・オーガナイズング・やまなしメンバー

普段は障害者施設の施設長をしています。なぜこの世界に差別があるのか？高校生のころに抱いた好奇心から、会社員をやめて福祉の仕事をするようになりました。2013年7月の福祉関係者向けのワークショップでコミュニティ・オーガナイズングに出会いました。地元山梨県の社会福祉士がパワーを発揮できるようにオーガナイズすることから私たち同志の物語は始まります。

『山梨のソーシャルワーカーが、コミュニティ・オーガナイズングを学ぶ』

コミュニティ・オーガナイズング・やまなしは、困難を抱えた山梨県の社会福祉士たちが、専門職としての失敗を語り合うことができる機会や場所をもつことで、ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティを確かめ、職場で孤立して燃え尽きることがないように、コミュニティ・オーガナイズングを学び、山梨県の社会福祉士をオーガナイズして、地域でリーダーシップを発揮するリーダーを育てます。

さまざまな課題、生きづらさを抱えた人たちに関わる社会福祉士は責任を持って活動しながらも、ストレスで燃え尽きてしまう仲間が多いのが現状です。高齢者や障害者の問題、子どもの貧困、生活困窮、性的差別をはじめ多くの差別など、社会の問題を解決するには、1人の社会福祉士では無力であり、当事者や市民とともに社会を変革するために世代を超えた取り組みが欠かせません。社会福祉士がその役割を果たせるように、社会福祉士をオーガナイズしてリーダーシップを増やして、つなげていくことが私たちのキャンペーンです。



●オーガナイズ・センテンス

私たちは社会福祉士がソーシャルワーカーとしてのアイデンティティをもって仕事を続けられることを成し遂げるために、社会福祉士をオーガナイズし失敗を語り合う場を作ること、2017年3月31日までに、山梨県内3か所に拠点を作り共に活動していくリーダー（5人×3か所）得ることを達成します。

●同志は誰か？同志が直面している問題は何か？

山梨県には1000人以上の社会福祉士がいて、山梨県社会福祉士会には約380名の社会福祉士がいます。県内では、社会福祉を必要とする多様で広範な問題があり、社会福祉士にとって所属する組織や関係者からの期待に応えなければというストレスから、悩みや弱音が出せない、ミスは許されないと感じて孤立してしまうという現状があります。このような、悩みや失敗を共有したいができないでいる社会福祉士が私たちの同志です。

●問題の解決のためにどんな取り組みが必要か？

同志が直面している問題を解決するためには、社会福祉士がソーシャルワーカーとしての悩みや不安、失敗を語り合い、思い共有、共感することでソーシャルワーカーとしてのアイデンティティを確かめ、仕事と理想とのジレンマを認識して、自信をもって仕事が続けられるようにすることが必要です。そしてキャンペーンを通じて同志をつなげる取組が不可欠です。

●変革の仮説は何か？どのように同志の資源をパワーに変えていくのか？

私たちの同志が、自分たちの抱えている社会福祉士としての不安や失敗した思いを語り合える場を作ることができたら、ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティを確かめ合い、心が折れず、自信をもって働くことができるようになります。なぜなら、これまで使ってこなかった私たち同志のネットワークや、一人一人の同志が持っているソーシャルワーカーとしての能力や経験が、「失敗を語り合う会」を開催していくことで、お互いがつながって価値を共有することで、今を変えたいという社会福祉士の力を解放することができるからです。

●スノーフレークしていく組織をどのように作っているか？

山梨県の3拠点で、「失敗を語る会」を開催し悩みや失敗を語り合える場を作ります。そこで悩みを共有する社会福祉士（同志）のネットワークを作るためにコミットメントし、1年後に各地域で5人のスノーフレークリーダーを作ります。そしてCOワークショップを開催し、さらに同志を増やしていきます。

●キャンペーンを通しての一番の学びは？

直面する困難を共有する「失敗を語る会」を開催してきたことで、ソーシャルワーカー自身が自分の価値を語ることの大切さを体験できたことは貴重な財産となりました。なぜなら自分たちの弱さを言葉にしたことによって、お互い悩みながら働いていることに共感し、それでも困難に向き合う希望をもって、選択する勇気を持てるようになったからです。また戦略的ゴールであるワークショップでは、実際にたくさんの仲間が思いを共有することができました。

まだまだ発展途上ですが今回のキャンペーンで私たちは、一人一人のソーシャルワーカーが失敗や不安を語ることで、同志を結びつけることにしっかりした手応えを感じました。「何がキャンペーンの一番の学び？」と聞かれれば「チャレンジすること！」です。



【分科会④-(2)】

廣岡睦 コミュニティ・オーガナイズング・久留米

京都府出身、福岡県久留米市在住。学生の時、日本の四季がなくなっているのではないかと危機感を持ち、気候変動問題に関わり始める。その後、主張の異なる人が共に行動する重要性を強く感たことで、ファシリテーションに興味を持ち、2015年1月末にCOと出会う。2016年9月と今年3月に、フルWSを久留米で開催。そこで出会った個性豊かな仲間と共に、COを使ってこれから久留米の市民セクターは大盛り上がり！（の予定）。

『目指せ！？久留米市民 30 万人でスノーフレーク』

久留米の街中で活動するリーダーを対象に、2016年9月に1回目のフルWSを開催し、その後、COの学びを深めるための勉強会を月1回開催すると共に、受講者をコーチとして育成してきました。2017年3月の2回目WSに“久留米産のコーチ”として9人デビュー！現在、COを自分たちの活動に生かす仲間を増やすべく、勉強会に加え、コーチ・講師育成を行っています。

そして、既にWSを受講している福岡・宮崎・佐賀の仲間とネットワークを結んで、18年末までには九州内の講師・コーチでWSを開催できることを目指しています。

私の発表では、下記の点について皆さんと学びを深めたいと思っています。

＜久留米という街全体で観えてくる変化＞

- ・一つの地域でCOを取り入れて行くことで得られる効果とその可能性
- ・COという共通言語を持った仲間が街中に増えることで描ける未来

＜やっぱり街は人で出来ているという確信＞

- ・COを全く知らない地域の仲間に、押しつけではないCOの導入の方法
- ・キーパーソンの重要性、誰から誘う？誰まで誘う？
- ・「COを学んで面白かったね！」で終わらず、各人が実際に使いこなせるようにするまでの道のり（COは乗馬の様なイメージも持っています。じゃじゃ馬にしがみついても乗りこなすかどうかは、その人次第！）



●オーガナイズ・センテンス

私たちは（大ゴール、未定）を成し遂げるために、久留米市内で既に個人・団体内で活躍している市民をオーガナイズし、九州内で講師・コーチを育成し、既に WS を受講した福岡・宮崎・佐賀の仲間とネットワークを構築することで、2018 年末までに“九州産の仲間”によるフル WS 開催を実現します。

●同志は誰か？同志が直面している問題は何か？

私達の同志は、久留米市内で既に個人・団体内で活躍している市民。個人が周りにある問題を感じて既に動いていて、かつそれぞれの活動に少しずつメンバーが重なっています。

直面している問題は、

- ・サークル活動から脱出できない規模感、賛同者、お金、影響力・・・？
- ・公が進める大きなことに市民が入り込めない
- ・市民の力が過小評価されている
- ・市民が公や大きな力と協働する方法を知らない

●スノーフレークしていく組織をどう作っているか？キャンペーンを通しての一番の学びは？

①役割を分散させていくことの重要性

ついつい全部自分で進めて把握してやりとうになるけど、任せていくことで自分が想像しなかった規模・アイデアへどんどん広がる。少し思考や時間に余裕ができるから、新たなチャレンジができる。

②こまめなコミュニケーションと適材適所の見極め

コアになりそうな人で、一緒にやることを楽しんでくれそうな人を見つける。対象者本人にどんなことがやりたいか、やりたくないかを聞くだけでなく、その対象者の周りにいて一緒に活動している人からも、どんな状況が活動しやすいと感じているかなどをヒアリング。役割分担を丁寧に。

【ファシリテーターからのレポート】



池本修悟
COJ フェロー・共同設立者



久保田裕輝
COJ WS コーチ

（１）プレゼン内容

■田村正人さんのプレゼン

地域福祉の現場で社会福祉士は「専門職なのだからできるでしょ」と期待されているが、職場に社会福祉士は一人しかいないことも多く孤立しています。そのような中、山梨県内にいる社会福祉士を同志と考え、悩みや弱音が出せない、ミスは許されないと思って孤立してしまう現状を変えるために、毎月ミーティングを開催し、県内３つの拠点で、３か月に１回のペースで「失敗を語る会」を開催し、若い社会福祉士が、安心して自分の気持ちを話せる場を設けていきました。さらに今年の３月に山梨ではじめてのフルワークショップを開催することができました。

■廣岡 睦さんのプレゼン

2016年１月に京都にてCOWS受講をし、どうしても久留米でCOワークショップを開催したいと思い同年９月に３人のコアメンバーを中心に参加者２４名を集めてワークショップを開催しました。この時点で久留米在住のコーチは廣岡さん一人でした。第１回ワークショップ終了後、参加者の中で月１回の勉強会を開催。そのメインの参加者たちからCOの理解度も高くコーチにもなりたいメンバーが現れました。さらに戦略的にそれぞれの活動でCOを使いこなせたら、より活動がパワフルになると思った人たちを廣岡さんが「コーチしようよ」とリクルートし、2017年３月の第２回ワークショップでは９人の人がコーチデビューすることとなりました。

（２）質疑で上がった内容と回答

質問：久留米においてCOJはどう関わっているのか？

回答：１回目、２回目のWSのサポートをしてもらっている。スタッフの会沢さんが久留米担当のため、彼の予定を合わせて、振返り会をしています。

質問：山梨の今後の課題はなにか？

回答：次の段階・多様な分野、多様な方を巻き込むことが必要です。

質問：地方でCOを展開するうえで、COが有効だと思わせるには何が効果的か？

回答：各団体に併せてメリットを用意することです。１つのミニワークショップを持っていき、実施のコミットメントを得ることです。

質問：なぜ久留米においてキャンペーンをしようとしているのか？

回答：現在久留米は人口が増えているが、あと１０年したら街はより厳しい状況になっていくことが予想されます。そのような中、実践を通じて自分たちの街を自分たちで作るという体験と自信をつける機会がキャンペーンを通じて得られると考えたためです。

(3) ファシリテーターとして登壇者から学んだこと

●田村さんのプレゼンからの学び

同志（困難に直面する当事者）の大事さに気づくきっかけを与えてくれました。福祉職で働き、困難に寄り添いつつも、仕事を終えて困難な状態から一時的にかもしれないが現場から離れることができる支援者だけではだめで、障害を持つ本人や家族、認知症の家族がいる人、生活困窮家庭に育つ人、LGBTで悩みを抱えている人など当事者を同志になってもらうことが大事なのだと改めて考える機会となりました。

●廣岡さんのプレゼンからの学び

久留米で一人からCOをスタートするなかで、戦略的に関係構築を進めていくことの大切さと信頼する仲間が見つかったら信頼して役割を手放すことの大事さを感じることができました。



パブリック・ナラティブ・フェス

『心を動かす、ストーリーの力』

【パブリック・ナラティブ・フェスの概要】

4人のオーガナイザーが新たな仲間を得るためのストーリー「パブリック・ナラティブ」を披露します！聴き手の皆さんには、それぞれの活動に参加し、一緒に社会課題に対して行動するチャンスがあります。

【パブリック・ナラティブとは】

人が行動を起こす時、そこには必ずストーリーが生まれます。また、人が動くためには、まず心が動かされるものです。

なぜ自分が行動を起こしたか、自身のストーリーを語って聞き手の共感を呼ぶこと（＝Story of Self）。聞き手と自分自身が共有する価値観や経験といった“私たち”のストーリーを語り、コミュニティとしての一体感を創り出すこと（＝Story of Us）。いま行動を起こすことについてのストーリーを語ることで、共に行動する仲間を増やすこと（＝Story of Now）。

これらが有機的に組み合わせられた、人の心を動かす物語を、パブリック・ナラティブ（公で語る物語）と呼んでいます。



【コメンテーター】

大西健丞 COJ 評議員

特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン 代表理事兼統括責任者（CEO）
一般社団法人アジアパシフィックアライアンス 代表理事兼統括責任者
公益社団法人 Civic Force 代表理事
特定非営利活動法人ジャパンプラットフォーム 共同代表

1996年にピースウィンズ・ジャパン設立。イラク、コソボ、東ティモール、アフガニスタン、リベリアなどで緊急人道支援に携わる。ジャパンプラットフォームの初代代表理事。大規模災害時に迅速で効果的な支援を行う、企業やNGO、政府をコーディネートする民間主導のプラットフォームを提唱し、2009年にCivic Force、2012年にアジア太平洋地域で相互支援の地域機関、アジアパシフィックアライアンス設立。



【プログラム担当】

笠井成樹 COJ フェロー・「ソーシャルプロデューサーズスクール」代表

神奈川県茅ヶ崎市出身

過去の哲学者や、恩師「鈴木寛」から学んできた「人の可能性を広げる」ための知識をもとに、それを実現するため教材作りや、COを広める活動を行っている。特に尊敬する哲学者は、エーリッヒ・フロム。

著作『自由からの逃走』と『愛するということ』が人生のバイブル。

【発表者 (50 音順)】

笠井成樹 COJ フェロー・「ソーシャルプロデューサーズスクール」代表



自分で発見する喜びは、指示に従った場合よりも、はるかにエキサイティングで価値の高いものです。

この世界を生きていく人として大事なことは、あなたが何をディスカバーするか。それを体現すべく哲学者たちの知を裏付けとした他には類をみない「体験」と「チーム学習」中心の内容で構成され、心から熱望するものを明らかにする全9回のスクールを行っています。

鎌田華乃子 COJ 代表理事



留学を機に日本の女性が妻や母親という役割に縛られ、生きづらさを抱えていることに気づき「ちゃぶ台返し女子アクション」を2015年に立ち上げました。女性が共に声を上げることで、政策を変える力にまで結びつける活動をするべく、現在は明治時代から変わっていない刑法性犯罪条項を改正するキャンペーンを実施中です。

栗林知絵子 豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク理事長



年収が生活保護費とかわらないワーキングプアの家庭で育つ子どもが、6人に1人います。家計が苦しくて十分な食事がとれない子、家庭の事情で夕食は一人、コンビニ弁当やインスタントもので済ませてしまう子、心と体を育むはずの「食」が揺らいでいます。こうした状況の中、食の面から子どもたちを支援しようと、全国で「子ども食堂」の活動をしています。

佐藤美代子 まんまるママいわて代表



2011年、東日本大震災をきっかけに、助産師が行う育児サロンを被災地で展開。県内9か所以上、250回以上2500人の母子と出会ってきました。その中で、「岩手県にも産後ケア施設が欲しい」という課題に対し、ママたちをオーガナイズし、2016年10月に産後ケアハウス開設に至ります。

松川莉奈 ing!! 代表



「誰もがなりたい自分になれる空間創り」を目指しています。

2015年6月結成。個々の性指向や自己の求める性のあり方を表に出せずに孤独を感じている人でも、自己を肯定して生きていける社会を目指して活動しています。2016年2月「LGBT 成人式 @ 埼玉」を企画・開催しました。

【プログラム担当からのレポート】



笠井成樹 COJ フェロー・「ソーシャルプロデューサーズスクール」代表

『泣く人が現れるほど、ストーリーが参加者の心を動かした』

5人のパブリック・ナラティブを発表している最中に、会場の中で感動して泣いている人が数人現れ、終了後の懇親会中でも、パブリック・ナラティブの感想を話し合っていた際に泣いた人が現れたなど、多くの聞き手の心を動かしたものになりました。

要因としては大きく3つだと考えます。

- 高い質のパブリック・ナラティブを準備できたこと
- 実践者がパブリック・ナラティブを語ったこと
- 音楽、ロールアップバナーなどの演出を凝ったことも多少影響したと思われる

また開催してみて、次回に向けてより良くする気づきのポイントがありました。

- 応援シートを配ったが、その場ですぐコミットメントを取れて繋がれる OST などの方法を導入する
- 5分でおさまる人がいなかったため、工夫が必要

フェスはこれからも継続的に開催していきます。自分も話してみたいという人が現れたので、ぜひ次のフェスでチャレンジをしてもらいたいです！





コミュニティ・オーガナイズイング用語集

発表に出てくる用語の中で、意味をとらえるのが難しい可能性のある語句の説明です。

用語	本書での意味
オーガナイズイング・センテンス	CO 実践する際に、自分たちが何のために、誰と共に、どのような取り組みをすることで、いつまでに、どのような状態を達成しようとするのか、を一文で表したものです。チームで共有する方針、あるいは、地図のようなものです。
スノーフレーク（型）リーダーシップ	リーダーシップをとるチームが、一つの目標に向かってそれぞれのメンバーの力を結集できるようにするため、メンバーそれぞれが明確に役割分担をし、互いにどのように協力し合えばよいのかが分かっているチームのあり方のことです。また、メンバーそれぞれがさらに仲間を増やしてサブチームを形成し、引き受けた役割を実践していくことで、主体的に参加する人のすそ野が広がっていきます。このようなチームの構成を図示すると雪の結晶型になることから、スノーフレーク型と呼んでいます。
ドット（型）リーダーシップ （ドット・リーダー）	リーダーシップをとるチームがあっても、実質的に、一人の強力なリーダーがさまざまな役割を引き受けてしまい、他のメンバーは役割が与えられない、あるいは一人のリーダーに依存してしまっている状態のことです。このようなリーダーシップのあり方では、主体的に参加する場が少なく、取り組みのすそ野が広がりにくいですし、中心の1人がいなくなった時に取り組みが途絶えてしまうリスクもあります。
大ゴール	CO 実践を積み重ねた先に達成したい理想の状態を明示した目標のことです。
戦略的ゴール	大ゴールに到達するためには、まず手始めに、期間や地域などを区切って現実的に達成できそうな目標を設定する必要があります。その目標は計測可能なものに設定し、それを戦略的ゴールと呼び、ゴールの設定と共に戦略、戦術をしっかりと練って、着実に積み上げていきます。
変革の仮説	「私たちが〇〇をすれば、結果は〇〇となるでしょう。なぜなら、〇〇だからです。」という一文で表現する仮説です。目指す変化が生まれていないのはなぜか、をしっかりと分析することで、変革を実現するために、何をすればよいのかを、論理的な理由づけと共に明確にすることができます。

パブリック・ナラティブ	人々は心が動いた時に、行動を起こします。「自分がなぜこの活動をしているか」、「なぜ活動が聞き手に関係するのか」、「そしてなぜいま共にアクションを起こさなければならないのか」。人々の心に共鳴するストーリーを語ります（ストーリー・テリング）。
ストーリー・オブ・セルフ	不確実な状況でもリーダーシップを発揮しようと思い立った瞬間と、その選択に現れる自分の価値観についてストーリーで語り、聴き手のモチベーションを引き出します。
1 : 1（または 1 on 1、1 : 1 ミーティング）	意識的に相手と関係をつくる「関係構築」の手法の 1 つです。一対一の対話で互いの価値観を探り、共通する価値観、関心を見出し、提供しあえる資源を確認することで、信頼関係を築き、どう協力し合えるかを見つけます。
コーチング	（オーガナイズングにおけるコーチングは）問題に直面した人がリーダーシップを発揮できるように手助けすることです。助言を与えるのではなく、質問を通じて相手から解決方法を引き出します。
コアチーム（またはリーダーシップチーム、一層目）	同志（問題に直面し、立ち向かおうとする人たち）をオーガナイズする上で核となるチームで、4～8 人程度で構成します。共通の目的の元、多様なスキル・資源を持つメンバーが集まり、明確なルールを作り、各人が相互依存しながらリーダーシップを発揮していきます。
二層目、三層目	コアチームの一層、二層外にできるチームです。一層目と同様に各人がリーダーとしての役割と責任を持ちます。コアチームメンバー（三層目の場合二層目のメンバー）がリーダーとなり、他メンバーのリーダーシップを育てます。



オーガナイザー祭 2017 レポート

発行年月日	2017 年 6 月 24 日
執筆・協力	安谷屋貴子、池本修悟、板垣泰之、大澤祥子、小田川華子 笠井成樹、鎌田華乃子、久保田裕輝、是常高洋 佐藤美代子、関口真司、田村正人、中畠聡、二宮雄岳 松澤桂子、室田信一、廣岡睦
編集	会沢裕貴、安谷屋貴子、鎌田華乃子
デザイン	会沢裕貴
発行者	NPO 法人コミュニティ・オーガナイズング・ジャパン http://communityorganizing.jp/